

味方と偽ってやり過ごそうとする忠度

(六野太が)「抑いかなる人でおはしまし候ふぞ、名のらせ給へ」と申しければ、

(忠度は)「これは味方ぞ」(と偽る。)

貴族の風習であるかね黒(鉄を酸化させた液で歯を黒く染めること)で平家の公達であることが発覚

(忠度が)「これは味方ぞ」とてふりあふぎ給へる内甲より(六野太が)見入れたれば、

(忠度の歯が)かねぐるなり。(六野太は)あつばれ味方はかねつけたる人はないものを、平家の公達でおはするにこそと思ひ、……

忠度の家来たちの逃亡

(忠度が六野太と戦い始めたのを見て)百騎ばかりある兵ども、国々のかり武者

(傭兵)なれば、一騎も落ちあはず、われ先にこそ落ち行きける。

六野太を圧倒する忠度

(忠度は)熊野育ちの大力の早業にておはしければ、やがて(すぐに)刀を抜き、六野太を馬の上で二刀、落ち着くところへ一刀、三刀までぞ突かれたる。……(六野太の傷は)薄手なれば死なざりけるを取つて押さへて、頸をかかんとし給ふところへ、

不意打ちを受け右腕を失って観念する忠度

(忠度が六野太の)頸をかかんとし給ふところに、六野太が童遅ればせに馳せ来つて、打刀を抜き、薩摩守の右の腕を、肘のもとよりふつと斬り落す。今はかう(いまはこれまで)とや思はれけん、じばし退け、十念(南無阿弥陀仏と十回唱えること)唱へんとて、六野太をつかつて(つかんで)弓だけはかり(弓の長さ分の距離)投げのけられたり。

念仏を待たずに忠度の首を討つ六野太

(忠度は)その後西に向かひ、高声に十念唱へ、光明遍照十方世界、念仏衆生攝取不捨(念仏のあとに唱える文句)と宣ひも果てねば、六野太後ろより寄つて薩摩守の頸を討つ。